

北欧の赤いバラ：福祉国家建設と社民党リーダーたち

岡 沢 憲 芙

「北欧の貧しい農業国」からスタートして、「世界でも最も豊かな福祉・工業国家」のひとつに発展したスウェーデン。「移民を送り出す国」から「移民を受け入れる国」への変身と表現することもできる。その軌跡は「文明の挑戦」と呼ぶにふさわしい。実際、スウェーデンの発展過程を辿ろうとして、各地にある博物館を訪問すると、それが「奇跡に近い挑戦」であったと痛感させられる。建造物こそ威風堂々としているが、その陳列物たるや……。落差の大きさに驚かされる。

スウェーデン型福祉社会を建設した駆動力は、何であったか。180年にも及ぶ平和の伝統が社会資本を充実させ、政治や行政に対する基本的信頼感を広げ、そうした政治的信頼が市民の貢献意欲を刺激したという側面は否定できないであろう。それとともに、社民党のリーダーの努力も重要な理由であろう。1932年から76年までの44年間にも及ぶ長期政権は整備された福祉システムの構築を可能にした。複数政党制度を採用している国で、自由選挙を採用している国で、これほど長期にわたって政権を担当し続けることは至難のワザである。常に魅力的な政策選択肢・リーダー選択肢を提供することは、競合的な政党市場では難しい。政治的消費者は薄情なほど、飽きっぽいし移り気である。ちょっと魅力的で安い商品が市場に並べば、簡単に消費行動を変更する。ウルトラ高負担を要求する福祉政策に商品鮮度を与え続けることは、多くの国の経験からいっても、不可能に近い。「減税コール」をはねのけるのは容易ではない。

社民党は①自由 ②平等 ③機会均等 ④平和 ⑤連帯・協同 ⑥安全 ⑦安心感 ⑧公正を基幹理念として高水準の福祉社会を建設したが、高負担に伴う尖鋭な納税者意識をパートナーにしていただけに、常に自己省察に膨大なエネルギーを投入した。福祉政策の生命線は「継続可能性」。それを可能にするのは広大なコンセンサスである。政治や行政に対する基本的な信頼感がコンセンサス形成の出発点である。社民リーダーたちは「穏健な多党制」という枠組の中で、コンセンサス・ポリティクス・メカニズムを構築したのであるから、見事。

「国民の家」というコンセプトを案出して福祉社会の枠組を策定した P-A・ハンソン。彼は「スウェーデン型福祉社会の建設者」の名がぴったりする。大戦後の経済的繁栄を壮大な福祉社会の建設に投じ、今日の福祉システムを完成させた T・エランデル。彼は「国民の父」という名にふさわしい。そして、スウェーデン型福祉社会の理念を国境線を超えて展開しようとした O・パルメ。そして、パルメと同じく、エランデル学校の優等生といわれる現在のイングヴァール・カールソン。それぞれが個性的なリーダーであり、研究意欲を掻き立てる。

「だれか1人」「どれか1点」と問われたら、J・ブランディングと彼の膨大な演説・著述を集めた『演説・草稿集 Tal och skrifter』全11巻をあげたい。彼こそが、結党初期のスウェーデン社民党を指導し、福祉社会建設の最強のモーターともいえる労働組合全国組織を結成・指導した名政党政治家である。後発工業国家・スウェーデンにおける社民主義運動を、平和主義・議会主義・協調主義でまとめあげた彼の忍耐強い努力がなければ、時おり爆発の兆しを見せていた過激な急進主義に直撃されて、その後の長期政権など望み得なかったのではないか。福祉国家建設を思念する政治的情熱は冷徹な合理主義をパートナーとして要求されることを思いしらされる。

(おかざわ・のりお 早稲田大学教授)